

秦系詩評考

——韋應物との唱和詩を中心として——

土 谷 彰 男

一 緒言

中唐の詩人である秦系には、劉長卿をはじめ、錢起、韋應物、皎然、戴叔倫などといった詩人との間に詩の往來があった。とりわけ、「五言長城」の名を得た劉長卿とは、頻繁に詩の唱和を行っていたことが知られている。高棅『唐詩品彙』には、韋應物の「雅澹」、劉長卿の「閑曠」、錢起・郎士元の「清贍」など、當時を代表する詩人の列に、秦系を「山林」として加えて、これらを「中唐の再盛」として、高い評價を與えている。秦系に對するこのような評價はおおむね、彼が劉長卿と同様に五言詩に優れると見なされていたことによるものである。

秦系の五言詩が評價を受けてきたのは、劉長卿との關連の

ほか、同時代の韋應物に稱讚の言辭があつたとされていることによる。計有功『唐詩紀事』は、劉長卿「五言長城」の話柄に續いて、次のように述べている。

韋答系云、「知掩山扉三十秋、魚須翠碧棄床頭。莫道謝公方在郡、五言今日爲君休。」蓋系以五言得名、久矣。

（『唐詩紀事』卷二八）⁽²⁾

「韋答系」は韋應物の「答秦十四校書」詩のことである。

『唐詩紀事』は、韋應物が「五言今日君が爲に休えん」と述べ、秦系に對して「今日、君の優れた五言詩を見て、その出來映えを稱讚するのだ」との發言があつたとして、秦系の五言詩が當時から高く評價されていたと考えている。

また、胡震亨『唐音統籤』も同様に、劉長卿の「五言長城」に加えて、韋應物が大いに稱讃していることを述べたうえで、次のように、その根拠がこの句にあることを示している。

韋應物亦深推服之。有「五言長城爲君休」之句。

（『唐音統籤』卷二六八⁽³⁾）

ここで着目されるのが、引用句の誤用である。これは本来、「五言今日爲君休」とあるべきところだが、この誤用によって圖らずも、劉長卿と秦系が同一視されていることが明らかにされ、韋應物の言う「五言」が「秦系の五言詩」であることが明確に示されることとなった。このように、詩話類においては確實に、韋應物が秦系の五言詩に高い評價を與えたと考えているのである。

そこで問題となるが、韋應物の言う「五言」の解釋である。筆者はかつて「中唐初期における蘇州文壇の形成についての一考察——文學理論の展開と五言古體詩について——」⁽⁴⁾（以下、先論1と呼ぶ）において、韋應物のこの詩を採り上げた。韋應物と秦系の間に詩の唱和が行われていた頃、韋應物は蘇州刺史の任にあって文會における主導的な地位を占め、秦系

秦系詩評考（十六）

はそれに參與した一人であった。拙論では、當時の状況から、韋應物を中心に蘇州文壇が形成されていたことを論じ、その要件のひとつとして、五言古體詩が積極的に用いられていたことを指摘した。そして、その傍證として、韋應物の「五言今日爲君休」の箇所に着目し、そのうえで、「五言古體詩を標準詩型とする認識が彼らのなかで共有されていた」（五四九頁）と述べた。つまり、韋應物は秦系の七言絶句の作に應ずるべく、「五言今日君が爲に休めん」と述べたのであって、この「五言」は「韋應物の五言古體詩」であると考えたのである。

一方、さきの『唐詩紀事』などに見られたように、この「五言」は「秦系の五言詩」を指すものであった。後に詳述するが、秦系は、五言律詩を得意とした劉長卿と並び、同じく五言律詩に優れた詩人と考えられている。したがって、詩話類などの評價史の観点からすれば、この「五言」は「秦系の五言律詩」を指すことになる。『韋應物集校注』（上海古籍出版社、一九九八年十二月）といった現行の注釋書がこの語に對して「秦系は五言詩に長じていた」と注を加えるのも、韋應物が秦系の五言詩を評價したとする、このような評價史の観点を踏襲したものである。

このように見てみると、なるほど、韋應物の作に言う「五言」は、「秦系の五言律詩」と見なされて然るべきではある。しかし、作品の背景には蘇州文壇が展開されていたことに注意を拂うならば、この「五言」は、「韋應物の五言古體詩」を指していると解釋できるのではないだろうか。このことは、當時の蘇州文壇の實態を明らかにするのみならず、秦系の文學を理解することにおいて、韋應物の視點が必要とされていることを示している。そこで本稿では、まず秦系の詩評について整理したうえで、韋應物の言う「五言」の解釋を明らかにし、それを手がかりとして、秦系の詩歌とその評價が如何なる理解のもとにあるべきかということについて検討したい。

二 「五言長城」と秦系評

『新唐書』卷一九六・隱逸傳には秦系(6)の傳記が見えるが、これは、編纂官の一人であった呂夏卿によって新たに収録されたと言われる。そのうち、秦系に對する詩評については、秦系とほぼ同時期の權德輿の言及を引用して、次のように述べている。

與劉長卿善、以詩相贈答。權德輿曰「長卿自以爲五言長城、

系用偏師攻之、雖老益壯。」

この權德輿の言は、彼の著した「秦徵君校書與劉隨州唱和詩序」(以下、「唱和詩序」と呼ぶ)より出ることが分かっている。この「唱和詩序」は、秦系という人物とその詩風について、同時代の詩人の眼を通して示されており、秦系の詩評を考察するうえで重要な資料となる。いまその全文を次に掲げよう。

儒有秦公緒者、當天寶理平之世興麗、則鼓盛名於當時。遭多故、道進身退。越部山水、佐其清機。圓冠野服、倏然自放、宅遐心於事外、得佳句於物表、不知華纓丹轂之爲貴者。幾四十年、方帥時賢、軾固懸榻。昔鄭公通德、有瀝門之號。秦君麗句、創里亭之名。慕風騷者、多所嚮仰。貞元中天下無事、大君好文。公緒舊游、多在顯列。伯喈文學之徒、爭爲薦首、而迦陽大夫、公之章先聞。故有書府典校之拜、時動靜不滯於一方矣。

七年春、始與予遇於南徐。白頭初命、色無愠忤。知名歲久、故其相得甚歡。因謂予曰、「今業六義以著稱者、必當唱酬徃復」、亦所以極其思慮、較其勝敗。而文以時之、聞

人序而申之、悉委笈中、得數十編、皆文場之重名。強敵且見、校以故敵。故隨州劉君長卿贈蒼之卷、惜其長往、謂予宜敘。

曠夫、彼漢東守、嘗自以爲五言長城、而公緒用偏伍奇師、攻堅擊衆、雖老益壯、未嘗頓鋒。詞或約而旨深、類乍近而致遠。若珩珮之清越相激、類組繡之玄黃相發。音采逸響、爭爲前驅。至於室家離合之義、朋友切磋之道、咏言其傷折之以正。凡若干首、各見于詞云。

〔『文苑英華』卷七二六〕⁽⁸⁾

かの有名な「五言長城」の謂いは、この權徳輿の「長卿は自ら以爲らく五言長城たり」より出るが、この「唱和詩序」および「五言長城」については、特にその實態と關連して、これまで考察がなされてきた。高橋良行氏は、「劉長卿札記——『五言長城』の評價をめぐって——」〔愛知淑徳大學論集〕第六號、一九八〇年）のなかで、この「五言長城」が、五言律詩を得意とした劉長卿の自負心の表れであって、「自認・自贊によるもの」（九三頁）と述べ、「五言律詩に内在する題材・型式兩面にわたる可能性と、その作品化への自信が、曰く言いがたい愛好となつて、多作という形で反映した」（一〇〇頁）

と指摘する。このように、先行研究において、劉長卿は五律を得意としていたことが明らかにされている。⁽⁹⁾

一方、秦系については、「偏師を用て之を攻む」、また「唱和詩序」には「偏伍奇師を用て堅を攻め衆を撃つ」とあるが、いずれも劉長卿の「長城」の謂いに呼應した比喻表現である⁽¹⁰⁾と見てよいだろう。唱和集の序文などでは、この種の比喻によって、唱和者同士がいわば「好敵手」の關係にあることを示す場合があるから、ここでは、そういった關係性が示されていることが、まず了解される。

さらに、その内實を檢討しようとするならば、權徳輿の評語を兩者の唱和の實態に即して檢討されなければなるまい。もっとも、秦系と劉長卿の唱和集は、はやくに散佚して傳わらず、その内容を知るすべは失われている。斷片を劉長卿の集に求めるならば、秦系に唱和した詩は計六篇が見え、そのうち五絶三篇はすべて寄贈の作、五律一篇はいずれも答酬の作、ほか七絶一篇は寄贈の作である。ちなみに、秦系の集では、劉長卿に寄せた七律一篇が見えるのみである。このよう⁽¹¹⁾な唱和の狀況は、劉長卿の「五言長城」が「堅固」にして「衆多」⁽¹²⁾（攻堅擊衆）である様からほど遠く、それに立ち向かた⁽¹²⁾たとされる秦系の様子を垣間見ることも難しい。あるいは、

劉長卿の「五言長城」に對し、秦系は「偏師」、「偏伍奇師」などと、正攻法ではなく「からめ手」によってこれに立ち向かい、劉長卿とは異なつた新奇な着想や手法を用いていたことが想像される。高橋氏は前掲書において、「秦系の詩は、いわば一分隊によるゲリラ戦法で攻撃を挑」んだもの（九六頁）、また、「表現の緻密な完成度の高い劉長卿の五言詩に對して、秦系の詩は、より寡作ながら、時として人の意表を突いた名作を持つ、と解することも可能であるかもしれない」（同）と指摘している。⁽¹³⁾

むしろここで確認すべきは、秦系は劉長卿と同じく、五言律詩に優れた詩人であるということが、詩話類などの評價史においてはすでに定着した見方となつてゐることである。元・方回『瀛奎律髓』（卷四八・仙逸類）には、劉長卿と秦系の五律の作が採録され、その方回評には「史に稱すらく、劉長卿は自ら五言長城と號し、秦系は偏師を以て之を攻むと。系を以て高きと爲す似き者なり。今並びに二人の詩を此に刊す」と述べられている。「五言長城」を示したうえで、秦系は劉長卿と並んで五律に秀でた詩人であると認めており、そればかりか、あまつさえ當時は劉長卿より評價が上回るといった認識があつたことが了解されるのである。

三 詩話類における秦系の五言評

そこで詩話類における秦系評について見てみよう。詩話類には、秦系傳に載せる權德輿の言及を引用したうえで、韋應物の「答秦十四校書」詩による言及を、秦系が五言詩に優れていたことを示す傍證として擧げるものが多い。このような記述は、前節で見た①『唐詩紀事』、これと同様の記述を襲う②『全唐詩話』（卷二）のほか、③胡仔『苕溪漁隱叢話』がある。そこには、次のように述べられている。

「寄韋使君」詩云、「久臥雲間已息機、青衫忽著狎鷗飛、詩興到來無一事、郡中今有謝元暉。」韋應物「答秦十四校書」詩云、「知掩山扉三十秋、魚鬚翠碧棄牀頭、莫道謝公方在郡、五言今日爲君休。」系能詩、與劉長卿善、以詩相贈答。權德輿曰、「長卿自以爲五言長城、系用偏師攻之、雖老益壯。」故應物有「五言今日爲君休」之句、蓋謂此也。

（『苕溪漁隱叢話』後集卷一六）

このほか、前節で觸れたように、④胡震亨『唐音統籤』では、引用句の誤用によって「秦系の五言詩」が明示され、ま

た、⑤方回『瀛奎律髓』では、秦系は劉長卿と並んで五言律詩に優れていたとの認識が示されていた。

以上は、韋應物が秦系の五言詩を稱讚したと解釋するものであるが、これらと一線を畫すのが、⑥劉克莊『後村詩話』の記述である。ここでは、秦系傳にみえる權德輿の言を引用せず、韋應物の作のみを掲げ、次のように述べる。

韋蘇州與系詩云、「知掩山扉三十秋、魚須翠碧葉牆頭、莫道謝公方在郡、五言今日爲君休。」韋公五言獨步一世、而憐才下士如此。

（『後村詩話』新集卷四）⁽¹⁸⁾

「韋公の五言、一世を獨歩す」と、韋應物の五言詩が當時では主流であったことが述べられており、「五言」を、ここでは「韋應物の五言詩」とし、「自分が得意の五言古詩は、今日は君のことを考えて、作るのを止めておこう」として捉えていたことが了解されよう。

無論、秦系の作品は、五言詩ばかりではない。『秦隱君集』三十八篇によれば、五言詩は、律詩十五篇、絶句二篇、排律一篇の計十八篇であり、ほかすべてが七言詩であって、とり

秦系詩評考（土谷）

わけ七言絶句十二篇の多きに至っては五律の數に次ぐほどである。

ただ、詩話に採録された作品は、この數字の多寡とは関わらず、そのほとんどが五言律詩の作品であることは、注意されてよい。これについては、さきには『瀛奎律髓』を見てきたが、とりわけ、③胡仔『茗溪漁隱叢話』（後集卷一六）には、秦系の五律四篇に對し「閑遠有味」、また、⑥劉克莊『後村詩話』（新集卷四）には、五律五篇に對し「清趣翛然」といった評語が與えられていることが注意される。

これらの評語について、權德輿「唱和詩序」には、次のように見えていた。

詞或約而旨深、類乍近而致遠。若珩珮之清越相激、類組繡之玄黃相發。奇采逸響、爭爲前驅。

「詞或いは約にして旨の深きこと、乍ちたちま近づきて致の遠きに類いす」と述べるのは、秦系詩の措辭に對して、また、「珩珮の清越たること相い激するが若きは、組繡の玄黃にして相い發するに類いす」と述べるのは、その表現に對してのものであろう。

また、秦系を考察するうえで重要な資料と見られる、北宋・李昭玘「跋秦系詩」⁽²⁰⁾は、次のように述べている。

系、辭意清遠、諷而不怨、有古詩人之風。一時與遊者、錢起、韋應物、劉長卿、鮑防、耿漳、皆知名士。獨權德輿深愛之、非所謂大音希聲、大味必淡者歟。

〔樂靜集〕卷五⁽²¹⁾

この兩者の評釋は、秦系の文學に對する概況、あるいは總論を述べたものではあるものの、『苕溪漁隱叢話』の「閑遠有味」や『後村詩話』の「清趣翛然」といった評語に連なるものであることは見逃されてはならない。なぜなら、これらの評語は、「清空」⁽²²⁾や「流暢」の語をもって代表される中唐の詩風に聯絡し、とりわけ大曆文學においては、五言律詩がその中心にあったことがつとに指摘されているからである。秦系が「閑遠有味」「清趣翛然」などといった評を得ていたことは、正しく彼が五言律詩に優れていたという認識に基づいたものであり、この點において、秦系は典型的な大曆詩人であると見なしうるのである。

四 韋應物における秦系詩

ここまで考察を進めてきたように、韋應物「答秦十四校書」詩の「五言」が「秦系の五言律詩」を指すと解釋されてきたのは、詩話類の内容を踏襲するものであったからである。だが、秦系と韋應物の唱和の實態に即するならば、この「五言」が「蘇州文壇の五言古體詩」、すなわち、「韋應物の五言古體詩」と理解するのが、より適切であると考えられる。

この蘇州文壇について、とくに、五言古體詩がこの文壇において重要視されていた事實については、すでに先論1、および、「中唐蘇州文壇の理論形成における顧況の文學とその文學觀について」⁽²⁴⁾(以下、先論と呼ぶ)において論じたが、本稿では、それに若干の考察を補いながら、この兩者の唱和詩について、分析を進めていきたい。

秦系は、貞元六年(790)〜七年(791)ごろにかけて、徐泗濠節度使の張建封の辟に應じて校書郎を拜し、故郷の越州から任地に向かう途中、蘇州を經由すると、刺史であった韋應物との間において詩のやり取りを行った。韋應物は、貞元四年末に左司郎中から蘇州刺史に轉出したが、朝廷に在り

し頃は徳宗の公讜にて詩を賦すなど、宮廷詩人としての側面を持ち、また、蘇州では官舎を開いて文會を催し、多くの詩人と詩の往來を重ねていたように、地方官詩人としての側面も持ち合わせていた。秦系にとってこの度の訪問は、大詩人たる韋應物の知遇を得る絶好の機會だったに違いない。一方、韋應物にとってこの高潔たる隱士と親交を深めることは、自身の歸隱志向に叶うものであったはずである。これを契機として、雙方の間には詩の往來が始まったが、現存するのは、韋應物の二篇²⁵、秦系の一篇のみである。

卽事奉呈郎中韋使君 秦系

久臥雲間已息機 久しく雲間に臥して已に機息み
青袍忽著狎鷗飛 青袍忽として著れば 狎鷗飛ぶ
詩興到來無一事 詩興到り來りて 一事無し
郡中今有謝玄暉 郡中今有り 謝玄暉

〔秦隱君集〕「不分卷」

答秦十四校書 韋應物

知掩山扉三十秋 山扉を掩じて三十秋なるを知る
魚鬚翠碧棄床頭 魚鬚と翠碧と 床頭²⁶に棄つ

秦系詩評考（十六）

莫道謝公方在郡 道う莫かれ 謝公方に郡に在りと
五言今日爲君休 五言今日 君が爲に休めん

〔韋應物集校注〕卷五・答酬⁽²⁷⁾

秦系の作について、第一、二句では、隱棲から出仕に至った自身の姿を描く。「青袍」は官服を指すが、ここでは、秦系が辟召に應じた校書郎のことであり、朝官では正九品に相當する。「狎鷗」は『列子』に典故の見える語であり、隱士になつく鳥。ここでは、秦系が隱士としての生き方を止めて官途に就くことになったために、狎鷗は秦系を嫌惡して飛び去るのである。つまり「狎鷗飛ぶ」とは、秦系が仕官することを言うのである。續く第三、四句では、その途次、蘇州にて韋應物と邂逅するに及び、詩興が沸き起こり機心に捕らわれなくなつたと述べる。「謝玄暉」は南朝齊の宣城太守であった謝朓（字は玄暉）であり、ここでは、韋應物をその大詩人たる謝朓に見立て、その文藻を言祝いだ。

韋應物の作はこの秦系の作を承け、第一、二句では、秦系の、隱士たる高潔な姿を描き出す。かつては薛嵩の辟召を辭し、秦系自ら稱すところの「東海釣客」として三十年余りを經たこと、その間、笏（魚鬚）や珮玉（翠碧）に象徴される

官界に對して執着を見せなかったことが述べられている。第三、四句では、自身を謝朓に見立てたことに謙遜を示し、秦系より贈られた七言絶句に應ずるべく、得意の五言古體詩をあえて用いずに詩を作ったと述べているのである。

ここで問題になるのが、韋應物の作に見える第四句の解釋である。前節において見てきたように、詩話類の評釋によれば、韋應物が秦系の五言詩を稱讚したゆえに、秦系は五言詩に優れると見なされてきた。したがって、その場合、この句の「休」字は「美」讚美の意となり、「五言今日君が爲に休えん」と讀まれてきたことになる。

そこで、韋應物の作に見えるこの「五言」を、兩者の唱和の實態から分析するにあたり、特にその觀點について、次の二點に亘って整理しておきたい。

- ① 兩者いずれもが謝朓について言及する。
- ② 韋應物の文會は五言古體詩型が中心であるなかで、兩者いずれもが七言絶句の詩型に據る。

秦系の作では、蘇州刺史たる韋應物を宣城太守の謝朓に見立てた。これはつまり、爲政者として地方長官の立場にある

こと、かつ、詩人として高名な人物であることにおいて、このような連想が働いているのである。『梁書』卷二七・到洽傳には、到洽が宣城太守であった謝朓の知遇を得た話柄として、「謝朓の文章、一時に盛んなり。洽に見えて深く相い賞好し、日びに引きて與に談論す」とあり、知遇を得た文士の理想的な姿がここから見て取れる。唐詩において謝朓への言及は、相手を稱讚、ないしは激勵するものとして、いわば社交的な常套表現として散見されるが、秦系の作が韋應物の知遇を得るためのものなればこそ、その詩中に韋應物を謝朓に重ね合わせたのは、至極當然のことであった。

だが、韋應物の文會における詩の應酬を具に觀察すると、謝朓に對し、秦系の場合とは少しく異なる、ある共通した認識があったことが見いだせる。このことについては、先論²においてすでに觸れるところではあるが、ここでは、その認識を確認するにあたり、まず、韋應物「送宣城路録事」詩を見ておきたい。

江上宣城郡 江上 宣城の郡

獨舟遠到時 獨舟 遠く到るの時

雲林謝家宅 雲林 謝家の宅

山水敬亭祠 山水 敬亭の祠
 綱紀多閑日 綱紀 閑日多く
 觀游得賦詩 觀游して詩を賦し得たり
 都門且盡醉 都門且く醉を盡くさん
 此別數年期 此の別 數年の期

〔『韋應物集校注』卷四・送別〕

この作は、路録事という人物が宣城へ向かうのを送別するものであるが、一讀して明らかなように、一貫して謝朓への連想が働いている。ここで注意すべきは、韋應物が謝朓を如何なる人物として捉えていたかが象徴的に表れていることである。すなわち、頷聯には隱棲を志向し山水を賞でる詩人として、また、頸聯には公務の閑暇を得て詩を賦す郡太守としての謝朓がある。これはつまり、退隱と出仕の両面において安定的な均衡を保つ謝朓の像であると言つてよいだろう。

こういった謝朓像の認識は、謝朓への仰慕として詩中に表れるのみならず、韋應物の創作活動、ひいては處世態度にも影響を及ぼすものであった。先行研究では、韋應物に對する謝朓の影響はとりわけ、「郡齋雨中與諸文士燕集」詩（卷一・²⁸）をはじめとした「郡齋詩」と呼ばれる一連の作品に認

秦系詩評考（十六）

められることが指摘されており、また、蔣寅氏は、大曆詩人における謝朓の受容において、出仕にありながら退隱の境地を得る「吏隱²⁹」といった處世態度が深く關わることを論じている。ただ、大曆詩人に謝朓の影響を讀み取ろうとするならば、蔣寅氏の擧げる作例が顯著に示しているように、そのほとんどが近體詩型によつたものであること、これに對し、その大曆詩人の一人と目される韋應物の「郡齋雨中與諸文士燕集」詩が長篇の五言古體詩型に據るものであることは、注意されてよい。なぜなら、作品の影響關係の點から考慮されるべきは、謝朓の「直中書省」詩（『謝宣城集校注』卷三）や「高齋祝事」詩（同）などに見られる、退隱と出仕の間の矛盾の衝突は、五言古體詩の説理性や議論性を據り所としているからである。この點において、韋應物と謝朓の關連が強く認められなければならないまい。

もっとも、韋應物に對して謝朓が連想されるのは、秦系の場合のように、郡太守を念頭に置くからにはかならない。ただ、韋應物の文會において中心作となる「郡齋雨中與諸文士燕集」詩を見てみると、饒州への左遷途上にあつた顧況が「酬本部韋左司」詩（『全唐詩』卷二六四）をもってこれに應酬しているが、これらの作から謝朓に對する、ある共通した認

識を探ることが出来る。兩者の作において、次の表現が注意されよう。

神歡體自輕 神歡びて體自ら軽く

意欲凌風翔 意は風を凌ぎて翔けんと欲す

(韋應物「郡齋雨中與諸文士燕集」)

安得凌風翰 安くんぞ凌風の翰を得て

肅肅賓天京 肅肅として天京に賓たらんや

(顧況「酬本部韋左司」)

韋應物の「意は風を凌ぎて翔けんと欲す」を承けて、顧況は「安くんぞ凌風の翰を得て」と述べるが、これは、謝朓「直中書省」詩に見える、次の部分を典拠とするのは明らかである。

安得凌風翰 安くんぞ風を凌ぐの翰を得て

聊忝山泉賞 聊か山泉の賞を忝ままにせん

(謝朓「直中書省」⁽³⁰⁾)

これは、謝朓が中書郎であったとき、役所に宿直した際の作である。宮殿の景色を美稱をもって文飾したのち、風を凌いで天空を翔け、山水を思うがまま樂しみたいと結ぶ。朝官にあった謝朓の、ひたすらなる自然への憧憬⁽³¹⁾がそこに認められる。一方、韋應物の作では、自身の「神」(精神)、「體」(肉體)、「意」(意志)の充實において、「出仕と退隱」の二者を乗り越える姿がそこに認められ、現状の自己を肯定する地點まで推し進められている。つまり、同種の表現を用いながらも、謝朓においては、願望の表出にとどまっていたものが、韋應物においては、實現されるものへと踏み込んだのである。一方、顧況は、謝朓の本来の趣意を翻案した。左遷の途上にある自身の不遇を、韋應物が未だ歸朝を果たせざにいと重ね合わせ、いずれもが朝廷に戻るべき身であるとの思いを吐露している。つまり、「出仕と退隱」のベクトルを「歸朝と左遷」のそれにトレースしたのである。このように、兩者の作には、こういった表現のねらいこそ違え、そこには謝朓に對し一貫して、「出仕と退隱」といった、儼然たる梓組みの存在が共通して認識されていたことは、見逃されてはならない。

一方、秦系は雲霞に臥し狎鷗を逐う布衣の隱士であって、

秦系自身が「中年會て屢しば辟あるも、病多くして復た遅回す」（春日閒居三首）其三）、あるいは「終年喧を避くるの思ひ、常に五千言を事とす」（常山贈張正則評事）と述べるように、時の情勢からすすんで身を遠ざけ、官界の住人になることを頑なに拒んでいた。このことからすれば、韋應物や顧況に見られたような、「出仕と退隱」の衝突など起こりうべくもなかった。秦系に謝朓像を探ろうとするならば、郡主であり、かつ文會の座主である一點においてよりほかに見いだし得ず、あるいは、劉長卿の詩に見られるような典型的な謝朓像とさしたる相異はなかっただろう。劉長卿に、「玄暉翻りて理るあきむを佐け、郡齋頻りなるを聞き到らん」（奉和趙給事使君留贈李夔州舍人兼謝舍人別駕之什）、『全唐詩』卷一四八）とあり、また、謝朓の「窗中遠岫を列し、庭際喬木俯す」（郡内高齋閑坐答呂方曹）、『謝宣城集校注』卷三）を典據として「惟有り郡齋窗裏の岫、朝朝空しく對す謝玄暉」（送柳使君赴袁州）、『全唐詩』卷一五）と述べられているのが、それである。

秦系が「郡中今有り謝玄暉」と述べたのが阿諛追従の言だったとしても、それに應えて韋應物が「道う莫かれ謝公方に郡に在りと」と、謝朓との引き合わせを言下に打ち消そうとし

たのは、一面、大詩人に比された韋應物の謙遜が認められるものの、より重要なことは、そこに、「（筆者注——韋應物が）一個の文人として詩を賦し、相互に水平的な關係を取り結ぼうとするのが、郡齋燕集の新しさであった」と指摘するところの、蘇州文壇の出現を確認することにある。そうであればこそ、韋應物が、「五言今日君が爲に休えん」と述べて、秦系の五言詩に稱讚の言辭を贈ったとする詩話類の解釋は、この文壇の本質と乖離するものではなかったか。

そもそも、韋應物の作に言う「五言」の語が、相手方の詩文を指し示す語であると見なしうるのであろうか。韋應物の詩から文藻を言祝ぐ表現を調べてみると、「嘉藻」（三例）、「高文」（三例）、「芳蘭藻」、「麗藻」、「佳詠」、「高詞」、「金玉篇」、「金玉聲」（以上、各一例）といった美稱による表現、あるいは、「藻に酬いらるるに當に芬綯たるべし」、「篇翰雲の興るが如し」などといった形容や比喩を多用していることが確認しうる。したがって、「五言」の語をもって先方の詩文を賞賛することには當たらなと言つてよい。この点においてもまた、この「五言」によって「秦系の五言詩」を指し示す蓋然性は極めて低いことが了解されるのである。

このように、蘇州文壇の展開に即して了解されるべきは、

韋應物が述べる「五言」は、「韋應物の五言詩」、すなわち「韋應物の五言古體詩」のことを指しているということである。その五言古體詩こそが、韋應物を中心としたこの蘇州文壇で重視された詩型であった。

韋應物にはこのほかにも、同じ七言絶句の作である「送秦系赴潤州」詩がある。これは、貞元六～七年（七九〇～七九一）ごろ、潤州（現在の江蘇鎮江）に赴く秦系を送別した詩である。

近作新婚鑷白髻 近ごろ新婚と作りて 白髻を鑷ゆき
 長懷舊卷映藍衫 長ながに舊卷を懷おもくも 藍衫映うつず
 更欲攜君虎丘寺 更に君を虎丘寺に攜たえんことを欲するも
 不知方伯望征帆 知らず方伯の征帆を望むを

〔韋應物集校注〕卷四・送別

第一句と第二句は對句を作り、秦系は白髮の老翁にして再婚を果たしたばかりであり、長き詩業に比して仕官間もないことが述べられている。「舊卷」は、これまで書きためてきた舊作のこと。「藍衫」は官服を言うが、ここでは、さきに見た秦系「即事奉呈郎中韋使君」詩の第二句「青袍忽として

著れば狎鷗飛ぶ」と同じように、秦系が出仕したばかりであることを示す。以下、虎丘寺に共に連れ立ちたいが、赴任先の長官が君の到着を待ち望んでいるだろうと結ぶ。

ここで注目されるのは、第二句に「長懷舊卷」と述べ、秦系の詩業に言及していることである。この部分は、對句となる第一句に續いて、七言詩特有の輕妙な筆致を見せており、「君の長年に亘る詩業に比べ、この度官服を身に纏った君はまばゆく照り映えている」と、仕官という大事が、長きに亘る詩業の重みに對して僅かなものでしかないことを示している。これによって、韋應物は秦系に對してその詩業の側面をより重視していたことが了解されるのである。このような認識は當然、雙方が詩を唱和してきた來歴に照會されるべきものであったはずである。秦系が韋應物の知遇を得るべく贈った「即事奉呈郎中韋使君」詩に對し、韋應物は「答秦十四校書」詩において、秦系の作に應じて七言絶句を用いてこれに應じた。ここから始まる雙方の詩の唱和によって、秦系に對する見解は形成されてきた。こういった點において、この作が七言絶句の型式によって成り立つことの意味は決して小さくない。つまり、韋應物において、秦系は七言絶句を得意とすることが念頭に置かれていたのではないだろうか。韋應物

が「答秦十四校書」詩で、得意の五言古體詩ではなく七言絶句を用いたと述べた理由が、ここにあると考えられるのである。

この見方を補強するものとして、皎然「題秦系山人麗句亭」詩を見ておきたい。

獨將詩教領諸生 獨り詩教を將て 諸生を領し
 但看青山不愛名 但だ青山を看るのみにして 名を愛めず
 滿院竹聲堪愈疾 滿院の竹聲 愈ます疾きに堪え
 亂床花片足忘情 亂床の花片 情を忘るるに足る

〔全唐詩〕卷八一七

詩題の「麗句亭」は、天寶末年、秦系が安祿山の擧兵を避けて剡溪に隱棲した頃に築いたものである。皎然はそこを訪れた際、亭にこの詩を書き付けた。賈晉華『皎然年譜』³³では、建中四年（七八三）冬のこととする。詩には、秦系は多くの門弟を抱えるものの、彼自身は恬淡としていたことが述べられ、以下、麗句亭の風景が詠み込まれる。

第一句に見える「詩教」は、詩經から續く詩歌の正統的な典範のことであるが、彼の著した詩論書である『詩式』にし

秦系詩評考（上巻）

ばしば見られるように、皎然においては詩歌觀の正統性を主張する際に用いられる語である。皎然は韋應物に宛てた「答蘇州韋應物郎中」詩（『全唐詩』卷八一五）のなかで、冒頭「詩教 殆ど淪缺せり、庸音 互いに相い傾く。忽として風騷の韻を觀、我が夙昔の情に會す」と、韋應物と詩歌觀が一致したことを明らかにし、加えて、自身の詩歌觀を韋應物の五言古體詩に應じて示している。³⁴このように、「詩教」の語の使用が皎然においてその詩歌觀を示す尺度計であるとすれば、皎然が秦系に對し「君だけが詩歌の正統をもって多くの門弟を従えている」と述べたのも、秦系の詩歌は皎然にとって肯定されるもの、受け入れられるものとしてあったと見てよいだろう。この點において、この作が七言絶句から成り立つことは、さきの韋應物の作が容易に想起されるように、秦系が七言絶句を得意とする詩人であるとの認識が前提としてあったと見るべきではないだろうか。

五 結語

秦系に對する詩評は、劉長卿の「五言長城」に呼應する形で、五言律詩に優れた詩人と見なされてきたことがその根底にある。このような見方は、詩話という獨特な領域のなかで

共鳴し合いながら増幅されてきたものと見てよい。この點において、五律に優れる詩人としての秦系像は、確かに彼の文學の一面を映し出しはいるものの、それがすべてということにはならないはずである。一方、韋應物を中心とした蘇州文壇が展開するなかで、秦系はそれに參與し、この文壇が五言古體詩型を基調とすることを引き出して見せた。このことは、單にこの文壇の存在が明らかにされたことのみならず、秦系の七言絶句の作品が、彼自身の文學を形成することにおいて一定の意味を有するものであることを示していよう。このように、秦系の詩歌とその詩評を検討するならば、劉長卿の存在はともかく、韋應物の存在も閑却されるべきではない。なぜなら、この兩者はいずれも中唐期を代表する詩人でありながら、彼らの詩風は相互にまったく異なることが明らかにされているからである。大曆の余韻の中に生きた劉長卿と、元和文學の嚆矢となる韋應物との間の相異が集約的に表れているのが、この秦系に對する詩評であつたと言えよう。

【注】

- (1) 高棅『唐詩品彙』總敘(文淵閣四庫全書)に「大曆貞元中、則有韋蘇州之雅澹、劉隨州之閒曠、錢郎之清曠、皇甫之冲秀、

秦公緒之山林、李從一之臺閣、此中唐之再盛也」とある。

(2) 計有功『唐詩紀事』(上海古籍出版社、一九八七年七月)。

(3) 胡震亨『唐音統籤』(上海古籍出版社、二〇〇三年四月)。

(4) 『松浦友久博士追悼記念中國古典文學論集』(研文出版、二〇〇六年三月)。

(5) このほか、周祖譔主編『中國文學家大辭典 唐五代卷』(中華書局、一九九二年九月)の「秦系」の項目には、韋應

物の作を引用して秦系は五言詩に優れるとしている。

(6) 秦系、字は公緒。號は東海釣客。越州會稽(現在の浙江紹興)の人。開元十三年(七二五)ごろの生。天寶十二年(七五三)、科擧に應ずるも及第しなかった。天寶末年、安祿山の擧兵を避けて剡溪(剡山のこと。現在の紹興嵊州あたり、曹娥江の上流付近)に隱棲する。大曆五年(七七〇)ごろ、薛嵩の奏により右衛率府倉曹參軍に召されるが、病と稱して任に就かなかつた。大曆十三年(七七八)ごろ、妻謝氏との離婚により謗りを受けたため、劉長卿の滞在する睦州に流寓し、彼と詩を盛んに唱和した。また、湖州の皎然を訪れ詩を唱和している。大曆十四年(七七九)ごろ、泉州(現在の福建泉州)に客寓し、南安の九日山に爐を結び、『老子注』を著す。貞元六年(七九〇)から七年(七九一)ごろにかけて、徐泗濠節度使の張建封の招聘を受け任地に向かう途中、蘇州に逗留し、蘇州刺史の韋應物と詩を唱和した。本稿で採り上げる、秦系「即奉秦呈郎中韋使君」詩、韋應物「答秦十四校

書』詩、同「送秦系赴潤州」詩は、このころの作である。この時はまた、戴叔倫から送別の詩を贈られている。潤州（現在の江蘇鎮江）を通過した際、權德輿と邂逅し、「秦徵君校書與劉隨州唱和詩序」が作られた。貞元十六年（八〇〇）、張建封が卒すると、泉州南安に戻った。永貞元年（八〇五）ごろ、卒。傳は『新唐書』卷一九六。專論として趙昌平「秦系考」（『中華文史論叢』一九八四年第四輯、上海古籍出版社）があり、本傳に對して補正がなされている。このほか、北宋の李昭玘による「跋秦系詩」は、秦系の來歴を考察するうえで貴重な資料と見られる。これについては、注(20)を参照されたい。なお、本稿に採り上げる秦系の作品については、北宋・南安本の系統と見られる『秦隱君集』一卷・詩三十八篇（明銅活字本『唐五十家詩集』所收、上海古籍出版社、一九八一年八月）を底本とする。この本については、次注を参照された。

(7) 呂夏卿、字は縉叔、泉州晉江（現在の福建泉州）の人。傳は『宋史』卷三三二。『新唐書』世系表の編纂に最も功があったことが知られているが、北宋・蘇頌「呂舍人文集序」（『蘇魏公文集』卷六五）によれば、「呂縉叔夏卿、在唐史書、謂陸羽、秦系、避僭藩辟命、終窮不仕、宜列隱逸」とあるように、『舊唐書』に傳を残さなかった秦系に對し、呂夏卿がこれを『新唐書』隱逸傳に採り入れたという。さらに、北宋・李昭玘「跋秦系詩」（『樂靜集』卷五、後注参照）によれば、

秦系詩評考（上谷）

「比有客自泉南來歸、出系詩三十六篇、號秦隱君集。呂縉叔（呂夏卿）序其本末、與傳相合」とあり、また、南宋・葉廷珪『海錄碎事』（卷四下）は、「隱君亭／在泉州南安縣、爲秦系作、呂夏卿撰記。圖經（出典不明）」とあるように、呂夏卿が秦系の詩集を撰したことを明らかにしている。これらは、陳振孫『直齋書錄解題』（卷一九）に言うところの南安本のことに相當しよう。陳振孫は宋敏求『寶刻叢書』（三十卷、佚）から逸詩二篇を補い、三十八篇とした。以上の流れが、『唐五十家詩集本』所收の『秦隱君集』であろう。これとは別のものとして、清・瞿庸『鐵琴銅劍樓藏書目錄』（卷一九）に言うところの『秦隱君詩集』一卷は、胡震亨『唐音統籤』によれば、南宋・紹興年間の南安主管學事であった張端の刻本と見られ、『唐音統籤』および『全唐詩』四十篇はこの流れを承けたものと見られる。

(8) 李昉等編『文苑英華』（中華書局、一九六六年五月）。なお、本稿では、『權德之文集』（四部叢刊）、および前掲高橋氏論文を参照し、若干の校勘を施してある。

(9) 先行研究として、このほか、同氏による「劉長卿詩の表現をめぐって——評價史的側面から」（『中國文學研究』第八期、一九八二年十二月）、また、蔣寅『大曆詩人研究』上編（中華書局、一九九五年八月）がある。蔣寅氏はまた、『大曆詩人研究』上編・第三章「方外詩人創作論・二、隱士詩人の正派——秦系」（中華書局、一九九五年八月）のなかで、

中國詩文論叢 第二十七集

秦系は當時から五言律詩に優れると見られていたことを指摘する。

- (10) この種の比喩表現の特徴は、唱和の場を戦場に見立てていることである。その例として、白居易とその「文友詩敵」であった元稹の間には、『元白唱和因繼集』十七卷(佚)があったことが知られているが、白居易はその序文「因繼集重序」(朱金城『白居易集箋校』卷六九、上海古籍出版社、一九八八年十二月)に「夫れ文は猶を戦いなり」と述べている。白居易はほかに、劉禹錫との間に『劉白吳洛寄和卷』一卷(佚)、『劉白唱和集』卷三)があったが、その編纂過程を述べた「與劉蘇州書」(同卷六八)に「詩敵の勅なる者、夢得に非ざれば誰ぞ。前後の相答、彼此一に非ず。彼れ虚にして撃つべく無しと雖も、此れ亦た利に非ざれば行われず」と述べている。
- (11) 『全唐詩』、および『劉長卿詩編年箋注』(中華書局、一九九六年七月)による。
- (12) 前掲注(6)および(7)所掲の『秦隱君集』(唐五十家詩集本)による。
- (13) あるいは、律詩(長城)の劉長卿に對して、秦系は絶句(偏師)を用いていたと想像することもできよう。秦系の作品中、七言絶句の作例数は五言律詩のそれに次ぐほど多数を占めているからである。秦系の七言絶句については、本論において後に述べる。
- (14) 方回『瀛奎律髓彙評』下(上海古籍出版社、一九八六年四月)。
- (15) 劉長卿「尋洪尊師不遇」詩(『全唐詩』卷一四七)、および、秦系「題女道士居」詩。
- (16) 秦系が劉長卿よりも優れると見られていたことについて、このほかにも、胡應麟『詩藪』内編卷四・近體上・五言(中華書局、一九五九年十月)に「秦系『流水閣過院、春風與閉門』(筆者注——「山中贈張正則評事」詩)、小見幽楚、此外絶無足采。唐人謂勝劉長卿、時論不足憑如此」とある。この種の見方は、「權德輿のこの序文(筆者注——「唱和詩序」のこと)を想定する以外、他にはない」(前掲高橋氏論文・九六頁)とされる。
- (17) 胡仔『苕溪漁隱叢話』(人民文學出版社、一九六二年六月)。
- (18) 吳文治主編『宋詩話全篇』第八冊(江蘇古籍出版社、一九九八年十二月)。
- (19) 前掲注(6)、および(7)所掲の『秦隱君集』(唐五十家本)。
- (20) 李昭玘、字は成季、鉅野(現在の山東巨野)の人。『宋史』は濟南の人とするが、四庫全書提要により誤りとされる。元祐年間(一〇八六一—一〇九四)の進士。若くして晁補之と名を齊しくし、蘇軾の知遇を得た。傳は『宋史』卷三四七。集は『樂靜集』三十卷。「跋秦系詩」は、その内容によると、呂夏卿の序になる『秦隱君集』三十六編の跋文であるらしく、

『新唐書』本傳を引用し、秦系の傳記や作品について若干の校勘を施するほか、その詩風について述べている。

(21) 李昭玘『樂靜集』（四庫全書珍本初集・集部・別集類）。

(22) 胡應麟『詩數』内篇卷四に、「大概中唐以降、稍厭精華、漸趨澹淨、故五七言律清空流暢、時有可觀」とある。

(23) 蔣寅『大曆詩風』（上海古籍出版社、一九九二年八月）「第八章 體式與語言」。

(24) 『早稻田大學文學研究科紀要』第五二輯・第二分冊（早稻田大學學院文學研究科、二〇〇七年二月）。

(25) 『唐才子傳校箋』卷三・「秦系」（中華書局、一九八七年五月）、項目執筆者は儲仲君）は「三首」とするが、『全唐詩』卷一九〇「韋應物」に見える「酬秦徵君徐少府春日見寄」詩を、陳尚君氏は『全唐詩續拾』卷一八・「戴叔倫」〔全唐詩補編〕中華書局、一九九二年十月所收）のなかで、これを戴叔倫の作とする。

(26) 韋應物集の諸本はこの語を「床頭」とするが、あるいは、本論においてさきに言及した「後村詩話」の引用句に見られるように「牆頭」に作るほうが、意味が通りやすい。

(27) 陶敏・王友勝『韋應物集校注』（上海古籍出版社、一九九八年十二月）。本稿における韋應物の作については、これを底本とした。

(28) 葛曉音『山水田園詩派研究』・第九章 山水田園詩派的余響（遼寧大學出版社、一九九三年一月）、蔣寅『大曆詩人研

秦系詩評考（上谷）

究』・「五 自成一家體 卓爲百代之宗 韋應物」（中華書局、一九九五年八月）、および、赤井益久「郡齋詩について」（國學院大學漢文學會々報、一九九六年、のち『中唐詩壇の研究』創文社、二〇〇四年十月所收）。

(29) 蔣寅「吏隱：謝與大曆詩人」（『中華文史論叢』第五十輯、一九九二年十二月）、『大曆詩風』第三章 時代的偶像 大曆詩風與謝」（上海古籍出版社、一九九二年）。このほか、赤井益久「中唐における『吏隱』について」（『國學院中國學會報』第三十九輯、一九九三年、のち、『中唐詩壇の研究』創文社、二〇〇四年十月所收）に詳しい。

(30) 謝朓『謝宣城集校注』（上海古籍出版社、二〇〇一年四月）。

(31) 興膳宏「謝詩の抒情」（『東方學』第三十九輯、一九七〇年三月）。

(32) 松原朗「大曆様式の超克——韋應物離別詩考」（『中國離別詩の成立』研文出版、二〇〇三年六月）。引用文は、三一八頁。

(33) 賈晉華『皎然年譜』（廈門大學出版社、一九九二年八月）。

(34) 詳しくは、先論1を参照された。

(35) 劉長卿と韋應物の相異を論じたものとして、赤井益久「劉長卿詩論——長州縣尉時の左遷を中心に——」（『國學院雜誌』第一〇一卷第五號、二〇〇〇年、のち、『中唐詩壇の研究』創文社、二〇〇四年十月所收）がある。